

社会・環境部会 企画セッション：「原子力の哲学—2022 年度社会・環境部会賞受賞  
記念講演」概要メモ

- 2022 年度部会の優秀発表賞を受賞した、関西外国語大学の戸谷洋志先生より、受賞対象となった著書「原子力の哲学」について記念講演があった。本書は、哲学に関する知見に基づき、20 世紀半ば以降の西洋の 7 人の哲学者の原子力をめぐる思想を、原子力と人間とのかかわりについて整理したものである。  
記念講演を踏まえ、「原子力（学会）と哲学」と題して関西大学の菅原慎悦先生より、学会や社会が原子力と向き合うべき視点が提示され、パネル討論が行われた。

(1) 「原子力の哲学」戸谷洋志氏

- 原子力をめぐる哲学的な議論は、原子爆弾の投下をきっかけとして 20 世紀半ば以降に始まった。現代的なテーマである。原子力は、人間、技術、自然の関係に変化を加えるものの象徴である、として哲学者らは考察した。
- 西洋哲学では、古代において、技術は知性の営みの最下層であるとされた（アリストテレス）。人間の技術より、自然の方が上位にあり、理想であった（農業など）。自然は人間より優れているとみなされていた。
- 近代になると、技術が知性の営みを主導するとされた（ベーコン）。人間は技術によって自然の本性を解明する。自然は人間の技術によって支配されると考えられた。
- さらに現代では、技術は知性を奪い、人間を野蛮にするとの考えが生まれてきた（アドルノ）。技術は自然だけでなく、人間の本性を支配し、その結果、自然を破壊する力を持つとされた。
- このように、西洋哲学では、古代（自然が人間を支配する）→近代（人間の技術が自然を支配する）→現代（技術が人間も自然も支配する）で 3 者の関係変化があるとされ、原子力は、大きな変化をもたらす象徴としてとらえられ、人間が置かれている状況を解釈可能にする技術として論じられてきた。
- 原子力をめぐる哲学的な考察には、2 つの方向性がある。1 つは、核兵器を批判の対象とするもの、もう 1 つは、原子力発電を批判の対象とするものである。
- 核兵器への批判は、核兵器はすべての人間を殺害しうるほどの能力を持ち、人類の歴史を技術的に終わらせることができることについてである。核兵器は、人類の歴史の永続性への懐疑を引き起こし、歴史の永続性を前提とした人間社会のあり方を根本的に変容させることとなった。

- 原子力発電への批判は、原子力発電所が事故を起こし、放射性物質が大気中に漏出した場合、それを特定の空間的な限界にとどめることができる保証はなく、国境を越えて他国に影響が及ぼされる可能性があることについてである。放射性物質は、国境という人間社会の空間的な区画をかく乱する。
- また、放射性廃棄物の放射線量が自然放射線レベルにまで低下するには 10 万年かかるといわれている。それは、現在の世代が未来の世代に対して、影響を与える可能性があるということである。原子力発電は、空間的にも、時間的にも、人間社会が前提とする基本的な地平を逸脱する潜在性を秘めている。
- 核兵器と異なり、原子力発電は平和な技術だけに、それが持つ潜在的な脅威は認識されにくい。認識されにくいことそのものが脅威である。
- こうした原子力の脅威に対して、自然科学的な知識だけでは対応できない。つまり、原子力は、自然科学的な予測の限界、人間の理解力の限界を示し、ひいては（人間社会を秩序づけてきた）規範性の欠落をもたらしかねない、ととらえられてきた。
- 原子力の脅威への抵抗としては、領域横断的な対話を継続し、想像力を拡大し、落ち着いた態度を取り戻すことである。

## (2) 「原子力（学会）と哲学」菅原慎悦氏

- ドイツの哲学者アーネントは核攻撃を批判し、原子力の平和利用についても、原発事故が想定され、世界の破壊につながりうると批判した。事故を起こさなくても、原子力について人々が自由に語り合いさまざまな意見に出会う（公論：開かれた議論＝公共性）の機会を失わせるとした。日本の原子力立地地域の例をみても公論は形成されにくい状況がつくられてきた、との批判もある。
- 原子力はさまざまな観点（複数性）をもって認識され、公共性を崩すものととらえられている。複数性を担保し公共性を実現するには何が必要か？
- 戸谷氏は、想像力の重要性を述べている。福島第一原子力発電所の吉田所長の「胆力」を、所長が傾倒していた「正法眼蔵」に求める向きがあるが、所長はそのため読んでいたのではなく、日常生活と離れたところでの実践によって備わっていた力が、振り返ってみれば、重要な鍵となっていたということだ。技術者も社会リテラシーを身につけるべきとの議論に対して、こうした無目的性を意義づけるにはどうすればよいか？
- （菅原氏は）技術に対する批判は、技術実践の内側に深く入ってこそ行いけると信じている。とくに原子力の安全やリスクの実践では、哲学的に問いたくなるような

事柄がいたるところにある。例えば、原子力発電所の事故シーケンスについて、原理的に「最悪」に向かうことが想定されるなかで、その作業をどこでどのように打ち切るのか、リスク評価とそれを通して得られる我々の認識は、プラントの安全をどの程度とらえていると確信しうるのかなど。

- 現実には、技術実践の内側に踏み込もうとするほど、批判しにくさを覚えることも多い。技術利用に関わる現行の枠組みが構築されてきた過程を詳しく知れば、その困難さや知恵の深さを追体験することになるためである。しかし、それでも「リスク」という言葉を通して成り立っている技術実践に参画することで初めて、それについて理解し、そのルールにしばられるのを断ち切り、批判に向かう可能性を得ることができると思う。

### (3) パネル討論

・寿楽氏（東京電機大学）：著書にはドイツの哲学者ハンス・ヨナスの「月か剣か誰が判定するのか」の話がある。月と思っているのに剣と思われて、あとで月とわかるようなこともある。

・戸谷氏：判定することは無理である。環境が変われば変わるし、絶対に月であると思われていることは危険だ。これからのテクノロジーによって変わることもある。

・寿楽氏：原子力について複数性の話があったが、かなり多様である。

・戸谷氏：複数性は、価値観を作るためではなく、想像力を育てるために必要である。被害の光景を思い浮かべようとしても、想像力がついていかないテクノロジーが原子力である。放射性廃棄物の処分場ができ、100年たった時代に子育てし、暮らしている人々の気持ちを想像する力を持ってほしい。その技術と関わる人の人生を想像してほしい。

・土田氏（関西大学）：人は幸せになりたいと願う。幸せとは欲求を充足することである。技術は欲求を充足させるものとの考え方がある。他方、技術が人に振り回されるとの考え方もある。

・戸谷氏：技術は人の役に立つかが重要であろう。人が快樂を目指して選択する自由を持つこと。技術には両面があり、人の自由を奪うこともある。

・土田氏：技術に頼らないと幸せになれないのか。

・戸谷氏：技術をどうとらえるかである。ハイデガーなら、そうではない、となる。

・会場参加者：外部経済を哲学のなかでどうとらえているか。原子力は物議を醸すだけととらえているか。

・戸谷氏：そのとおり。原子力が置かれた時代のなかで、強いフォーカスがあたり、批判された。もし別の時代にあつたらどうなのかわからない。歴史相対性とかかわってくるのではないか。

・会場参加者：自然と技術の二項対立の話があつた。両者の間の距離の違いについて議論をしないのか。

・戸谷氏：循環的な西洋哲学の話をした。西洋と日本では、技術の置かれる環境が異なる。西洋中心的な話をした。新型コロナのように偶発的に起こる脅威もある。技術と自然を対立しないものとしてとらえる東洋的な考え方に興味がある。両者を統合した見方はあり得る。

(以上)